

連載

星と☆形【3】

星と☆形—The Symbol of Stars—第3章

西村昌能（京都府立洛東高等学校）& TENKYO-ML☆形チーム

第3章 星の名前とその起源

3-1 はじめに

世界のヒトは「星」をどのように言ったのでしょうか？ それにはどんな意味があるのでしょうか？ 今回は、星という言葉の広がりや星の持つ本来の意味を素人言語学者になりますし、探っていきたいと思います。

さて、今までのMLの話題から、言語学に話題がそれていった原因は福江純さんからの次の質問があったからです。

「英語の星 star の語源は、asterisk などと同じく、おそらく astra あたりでギリシャ、ラテン語系だと思います。もともと☆型の意味合いがあるかどうかはしりませんでは、イスラム圏では星は何と言うのでしょうか？ またその含まれている意味はどうなのでしょう。ちなみに、日本語というか漢語の星は、組み立てからあきらかに生きた太陽ですよね。古代中国では、星は太陽と同じものだとみなされていたのでしょうか。だとすると、やはり☆型の意味はなかつたでしょう。最後に、和語の『ほしはすばる』の“ほし”は、どっかで読んだ覚えはあるけど、忘れた。

#干す、と関係あったっけ？」

そこで印欧語（ラテン語、ギリシア語、サンスクリット語など）と中近東の言葉、アジアの言葉や西太平洋の言葉を集めてみました。ただし、アラビア文字などのラテン文字（ローマ字）で記載されていないものはアルファベットに変えています。辞書や書物にある場合はそのまま記載して

います。ない場合は正則にあうよう置き換えていませんがまちがいがあるかもしれません。注意して下さい。なお、単語の中に語頭に*が付くものがあります。これは、推定された言語であることを意味します。でも*形で示されるとは、素敵ではないですか。

3-2 印欧語では、星をなんと呼ぶのか？

まずは現代ヨーロッパの言語から

言語は相互に関係するグループにわかれていて、それを語族といいます。これは同一の祖語から分かれて成立したと考えられるのです。その一つにインド・ヨーロッパ語族（印欧語族）があります。ヨーロッパの言語は94%が印欧語族です。

現代ヨーロッパの言語で星をなんといっているのか調べてみると表1のようになります。

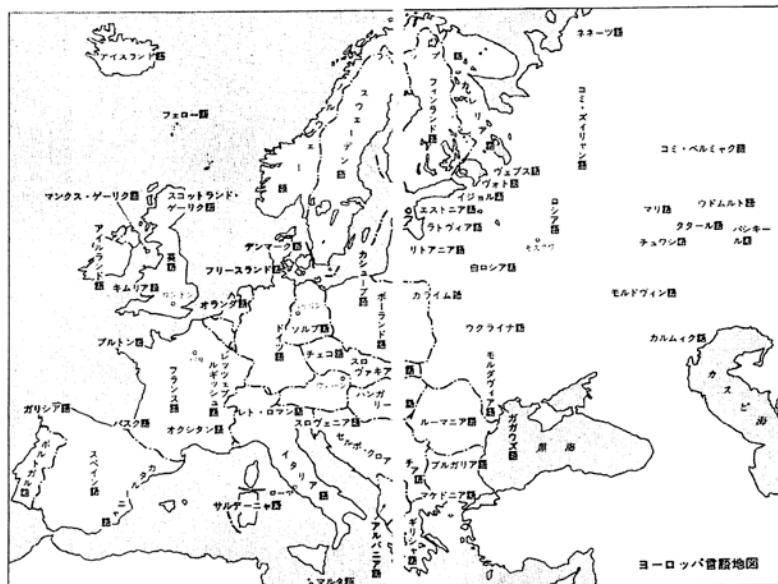


図1 ヨーロッパの言語分布 (67)

語族	語派・諸語	言語	星	備考	文献
インドヨーロッパ語族 ギリシア語		古典ギリシア語	astron	$\alpha\sigma\tau\rho\circ\nu$	1
		同	aster	$\alpha\sigma\tau\eta\rho$	1
アルバニア語派		アルバニア語	yll		2
イタリック語派		ラテン語	stella	< ster-ula	3
		同	astrum	< astron	3
		イタリア語	stella		4
		スペイン語	estrella		5
		ポルトガル語	estrela		6
		フランス語	etoile		7
		ルーマニア語	stea (単数) / stele (複数)		8
ゲルマン語派	西ゲルマン語	ドイツ語	Stern		9
		オランダ語	ster		10
		英語	star		11
	北ゲルマン語	スウェーデン語	stjarn		12
		デンマーク語	stjerne		13
		ノルウェー語	stjerne		14
		アイスランド語	stjarna		14
スラブ語派	東スラブ語	ロシア語	zvezda	з в е з д а	15
		ベラルーシ語	zorka		61
		ウクライナ語	zoriya	з о р ' я	16
	西スラブ語	チェコ語	hvezda		60
		ポーランド語	gwiazda		80
	南スラブ語	セルビア語	zvijezda		17
バルト語派		ラトビア語	zvaigzne		62
		アルメニア語	astl		79
ケルト語派		アイルランド語	sterenn		79
コーカサス語	コーカサス諸語	コーンウォール語	steren、sterran		79
ウラル語族	フィン・ウゴール	チエチェン語	seeda		78
		フィン語 (フィンランド語)	tahti		27
		エストニア語	t ē h/t		28
		ハンガリー語	csillag		29
		バスク語	eguzkibegi		30
孤立語			Jainkoaren-begi		30
			argizagi		30

表1 星を表すヨーロッパの言葉たち

表中の言語について少しばかりコメントします。イタリック語派はラテン語を祖語とする言語の集まりです。イベリア半島の言葉ではsの前にeをつけて語調を整えているようです。フランス語では、s自体が消失したようです。ゲルマン語派の言葉はよく似ています。英語、ドイツ語などの西ゲルマン語とノルウェー語などの北ゲルマン語とに分かれます。スラブ語派の言葉は他の印欧語に比べ、特異な表現をしています。聞きようによっては、ST (ZD)が聞こえてきます？ ロシア語、ウクライナ語、ベラルーシ語と共に東スラブ語です。ポーランド語やチェコ語は西スラブ語でバルカン半島のセルビア語は南スラブ語の言語です。バルト語派のラトビア語はバルト三国のラトビアで話されています。スラブ

語派ではないのですが、よく似た単語を利用してます ((そういうえば、ルーマニア語の yes は da で、ロシア語とそっくり)。

星はその民族に固有の言葉でしたが、惑星は借用語が多いようです。ロシア語の惑星は ПЛАНЕТА (planeta)、ポーランド語は planeta、フィンランド語は plannetta と同じになります。

次に、その他の言語を調べました。

バルカン半島のアドリア海沿いにアルバニアがあります。アルバニア語では yll です。アルバニア語はギリシア語に近い古い印欧語と言われていますが、ここはオスマントルコの支配下にありましたのでトルコ語の影響があるかもしれません。

かつて西ヨーロッパに広がっていたらしい

ケルト語派も印欧語です。この語派諸語はブリテン島周辺に残っています。アイルランド（ゲール語）やウェールズ（ウェールズ語）、ブルターニュ（フランスのブリトン語）で話されていますし、スコットランド（ゲール語）でも話されていました。このうちゲール語の仲間にオートバイレースで有名なマン島で話されていた（すでに死語の）MANXがあります。この言葉では、cowraghey lesh rollageyn, cur rollage rish, rollage, rolt, roltag, roltage, roltein, rontage、と変化するようですが、詳しいことはわかりません（調べたのがゲール語でかかれたホームページ(66)なので）。また、同じくケルト語の死語であるコンウォール語（イングランドのコンウォール半島の言語）では、steren、もしくは sterran で、こちらの方が star に近いですね。アイルランド語では sterenn でドイツ語みたいです。

北部ヨーロッパにあるウラル語族のフィン・ウゴール系の言葉、フィンランド語では星は tahti です。バルト三国の同じ仲間の言語であるエストニア語では t ë h/t です（/t/ はそれ以降が変化するということです）。ハンガリー語では csillag となります。

また、バスク語はスペインとフランスの西部ピレネー山脈で数十万人（但しバイリンガル）が利用している言語です。孤立語で印欧語が侵入しても、その言葉を保持している言語です。ただし、単語はラテン語やラテン系の言語の影響をかなりうけているようです。バスク語では、太陽を Eksi (eki)、日光を Eguzki といいます。その意味で、多くの地方で星を太陽の目 (eguzkibegi) または、神の目 (Jainkoaren-begi) と呼んでいます。辞書的には星は argizagi で、これは月明かりの意味も持ちます。argi は明るいという意味で～ egin で輝くという意味らしいです。バスク人の起源はわかっていないが、中石器時代の前5000年頃には、現代バスク人の特徴を備えた人類が確立したと考えられています (30)。ですか

ら、第1章で述べた5000年以上前のアビニヨン近くに見つかった石柱を作ったのは彼らの可能性が高く、ひょっとするとラスコーの壁画の星を描いたのは彼らの祖先であったかもしれませんのです。太陽信仰が強いと考えられていますから、やはり、アビニヨンの石柱の模様は太陽なのでしょうか。

ザメンホーフが作ったエスペラント語はラテン系の言葉を基本にしていますが、星は stelo (星、印としての星形、スター、verda stelo で緑の星=平和と希望の象徴) と astro (天体、星) があります (65)。

3-3 古典語の世界

イタリック語派の言葉（いわゆるラテン系）はラテン語を祖語とします。ラテン語は今から2500年以上も前からローマ共和国やローマ帝国で利用されていた古代の言葉です。当時、ローマ帝国の範囲に入った地域のいくつかで今もその方言と化した俗語から発展した言葉が話されているのです。ローマ帝国は古代ギリシア語から影響を受けていますが、この古典ギリシア語も地中海やヘレニズム地域で通用した言葉です。これも古い過去を呼び起こすのに最適な言葉です。印欧語の東の雄はサンスクリット語です。リグ・ベーダはこの言葉で書かれています。3000年以上の古さを誇っています。これら古典ギリシア語、ラテン語、サンスクリット語から印欧語の星を探ってみましょう。ただし、素人のする仕事ですので、「間違いは承知の上」と御承知おきください。

3-3-1 古典ギリシア語・ラテン語の世界

「astra, stella は、メソポタミアの女神 Ishtar や、それと関連したヘレニズム系? の女神 Astart あたりに由来しているかも知れません。ならば、☆形とは関係なさそう。」という綾仁さんの意見がありました。

さて、ラテン語の *stella* (女性名詞) は *sterula* が語源とされ、STER の意味は *strow*、*spread* となるようです。またラテン語には星を意味する *astrum* (中性名詞) なる語もあり、これはギリシア語から入ってきた語で $\alpha\sigma\tau\rho\circ\lambda$ *astron* (主に複数形で使用) が元です。この *astrum* もさきの STER が語根ですからギリシア語、ラテン語の起源は「広がる、まき散らかす」からきたものでしょう。(3)

さらに *astron* の他にギリシア語の星には、 $\alpha\sigma\tau\eta\rho$ *aster* があり、1 star、2 a flame、light、fire の意味をあげています(1)。なお、西アジアの民族がギリシア語を音訳するとき *a* は *i/e* に変化するのかも知れません。アレクザンドロス *Alexandros* がイスカンダール (*eskandar* (ペルシア語) や *Iskender* (トルコ語)) に変化するのはよく知られているのです。ちなみに、ウルドゥー語では *sikandar* ですが、こうなると誰のことか分かりませんね (イスカンダールはご存じ、「宇宙戦艦ヤマト」の目的の星ですね)。ですから、*aster* が *ishtar* に関する可能性も大いにありそうです。

3-3-2 ゲルマン語派の古語

ゲルマン系の言葉も STR が語根であるといえます。Webster(11)で *star* を調べてみますと紀元 1100 年から 1500 年の間で話されていた Middle English では *sterre* で、中期オランダ語に關係があるようです (中期オランダ語では *sterne* もしくは *sterre* で、現在のオランダ語 *ster* とドイツ語 *Stern* の両方の起源を持っています(79))。紀元 400 年から 1100 年ころ使われていた Old English (OE) では *steorra* だということです。この OE は西サクソンで話されていたアングロ・サクソン族の西ゲルマン語および低地ゲルマン語であろうといわれています。オランダ北岸にある島々をフリージア諸島といいますが、そこで話されている言葉、フリージア語の古語、古期フリージア語では *stera* で OE とよく似ています。また、古期高

地ドイツ語では *sterno* です(14)。文献(79)によると中期高地ドイツ語では、*sterne* に変化しました。ゲルマン人は 4 世紀にキリスト教に改宗したのですが、その時に新訳聖書がゴート語で書かれ、*stairno* が見いだされるようです。ちなみに、古期ノルウェー語 (バイキングの言葉) では、*stjarna* ですが (79)、アイスランド語と全く同じですね。アイスランド人はバイキングの末裔ですが彼らは、国民語として国語をバイキングの時代の単語に戻しているらしいです。

Hyper Dictionary(14)では *star* の意味として「空に撒かれたもの。または光の散乱や広がりを表す」ことをあげています。

英語の *star* はラテン語やギリシア語起源ではなく、それらを含めた印欧語の祖語の *ster をもとにして言葉で、古代ゲルマン人から受け継いだものだと考えるべきでしょう。

3-3-3 サンスクリット語を探る

サンスクリット語では星を *stri* としています。STRI という語は別に動詞もあり、それは、*scatter, strew, spread out* を意味するので(18)、古典ギリシア語やラテン語と同じ意味です。やはり、インドヨーロッパ語族は星は STR で表し、意味はまき散らかすからきているのでしょうか。まき散らかすというは光条が四方八方へ広がっていることからきたのでしょうか。これなら、まさしく、輻射、放射のイメージですね。また、以上のことから STR つまり *stella* や *astron*、*aster*、*stri* は明かり、光線との関係や星が夜空一面に撒かれた状態を意味しているのでしょうか。また、第2章で述べた実際に見える光条を意味しているのでしょうか。私には、どちらをも意味しているように思えます。

3-3-4 その他の古代印欧語

アナトリア語派のヒッタイト人は紀元前 1700 年頃小アジアに鉄の帝国を建設します。



図2 インド亜大陸の言語分布(68)

彼らは星を *astiras* といっていたようです。また、中国の西域地方のトルファン周辺で発掘された仏教文献に見られるトカラ語では *sre-n* (pl) です。トカラ語は 8 世紀まで使用されたインド系の印欧語族であると考えられています (79)。

3-4 南アジア、ペルシア語の世界

印欧語はヨーロッパと同じように、中東からインド亜大陸まで話されています。図2はインド亜大陸の言語分布(68)です。まずインド亜大陸の言葉を集めますと表2のようになります。

シンハラ語はスリランカ、コンカニ語は南インド、ベンガル語はインド東部～バングラデッシュのベンガル湾沿岸でパンジャーブ語

は北西インド～パキスタンで話されています。上のインド語派では語頭の s が落ちる傾向にあるといえます。イスラム圏で、ウルドゥー語(パキスタン・インドでの公用語)=ヒンディー語と同じでは、*tara* もしくは *sitara* (*satara*) です。*tara* はヒンディー語起源、*sitara* (*satara*) はペルシア語起源です(82)。

ただ、文献(19)では、*sitarah* (star) や *kaukob* (A star, constellation) というものありました。ウルドゥー語には方言があるのかもしれませんし、13世紀に作られた人工語のウルドゥー語にはペルシア語起源、アラビア語起源、ヒンドゥー語起源の単語があるので、上記のように星にもそれらに起源を持つものがあるでしょう。ウルドゥー語で惑星や衛星のことを *saiyara* といいますが、辞書(82)ではアラビア語起源だとしています。

かつて 1983 年にパキスタンの奥地（今、アルカイダが逃げ込んでいると言われている辺り）で私が採取した言葉でブルシャスキーラー（これは孤立語らしい、話者数、数万人）では、トロマトローもしくは *asi* シーナ語（ペルシア語系、話者数、30 万人）では、サスターでした。この辺りで聞いたウルドゥー語では星は *satara* でした(26)。

ペルシア語（ファルシー）はサンスクリット語や古典ギリシア語に匹敵する古い言葉で、一時期、トルコからインドまで商業用語

語族	語派	言語	星	備考	文献
インド・ヨーロッパ語族	インド語派	サンスクリット語	stri		18
		ウルドゥー語	sitara	ペルシア語起源	82
		同	tara	ヒンディー語起源	82
		同	sitarah		19
		同	koukob		19
		ヒンディー語	tara		20
		ベンガル語	tara		21
		シンハラ語	Taraka		22
		コンカニ語	neketru		23
		パンジャーブ語	tara		24
ペルシア語派	ペルシア語	ペルシア語	setare		25
		シーナ語	サスター		26
		ブルシャスキーラー	トロマトロー	孤立語？	26
シナ・チベット語族？	チベット・ビルマ語派？	ブルシャスキーラー			

表2 南西アジアの印欧語

語族	語派	言語	星	備考	文献
アフロ＝アジア語族	セム語族	アラビア語	najm		83
		同	kukab	スターの意も	83
		アッカド語	シュメール期 アッシャリア期	mul / nap mul / kakkab	ML ML
		現代アラム語		kaudva	31
		ヘブライ語		kokav	32
	ハム語族	古代エジプト語	sba		33

表3 アフロ＝アジア語族の星

や貴族の言葉としてその地域の共通語の役目を果たしました。そのペルシア語で星はsetareです。また、惑星はsaiyareです。saiyar(形)が巡回するという意味を持っています(25)。ペルシア語も古い言語ですがここに書いたものは、現代ペルシア語なので、注意が必要です。アラビア語からの移入があるからです。

以上は印欧語族でしたが以下のインド周辺の言語は少し違うようです。表にあります。

3-5 アラビア語とヘブライ語では?

中近東の言葉はセム語です。これはかつて「セム・ハム語族」と言われたアフロ＝アジア語族に属します。

綾仁さんはMLで、「旅の会話集アラビア語」を見ると、アラビア語で星は「ナジェム」というそうです。ただし、アラビア語では母音文字がしばしば省略されるので、アラビア文字表記をそのままアルファベットにすると「njm」となります。ペルシャ語、トルコ語と全く違いますね。同じセム語族のヘブライ語ではどうなんでしょう?と流されました。「『アラビア語の入門』(本田孝一 白水社1993)では、ナジュムの他にカウカブもあげていました。」とMLで返事をすると「美星スペースガードセンターにエジプト人が滞在しているので、聞いてみました。『ナジェム』(彼はネグムと発音してましたが)はstar, カウカブはplanetの意味だそうです。」とのこと。ウルドゥー語ではkaukobは星を表しています(19)。ちょっと混乱がありますがそれは辞書の

精度の問題なのかもしれませんし、原語から離れた意味で使われているのかもしれません。

ヘブライ語ではkokavでコーラヴと発音します。こうなると、kkbが惑星を表すとは限らないようですね。

「『アッカド語』(飯島紀 国際語学社 2000)に楔形文字一覧があり、そこに初期の絵文字まで載っているのですが、星を意味する文字は8本のトゲをもったもの(×と+を重ねたもの)を3つ並べて表しています。その文字の音は、シュメール期がmulとnap, アッシャリア期がmulとkakkabとなっています。アッシャリアのほうはセム語のようですから、アラビア語のカウカブはkakkabから来ているのかも知れません。おもしろいことに、ペンタグラム(五芒星)の絵文字もありますが、意味は「区域」です。メソポタミアでは五芒星は星とは関係なかったようです。」(綾仁さん)

mulが恒星でnapとkakkabは惑星の可能性が高いようです。現代アラム語では、星をkaudvaというようです(31)が、これも惑星の可能性があるかもしれません。

さらにハム語の古代エジプトのヒエログリフでは線で書いた☆形で書きsbaと発音したようです。エジプト語では母音は書きませんからサバーやソバーかセバーかそんな発音したのでしょうか(33)?。

ちょっとはずますが、アフリカ中央部のスワヒリ語ではnyotaです(77)。惑星はsayariです。どちらも单複同型です。アフリカには

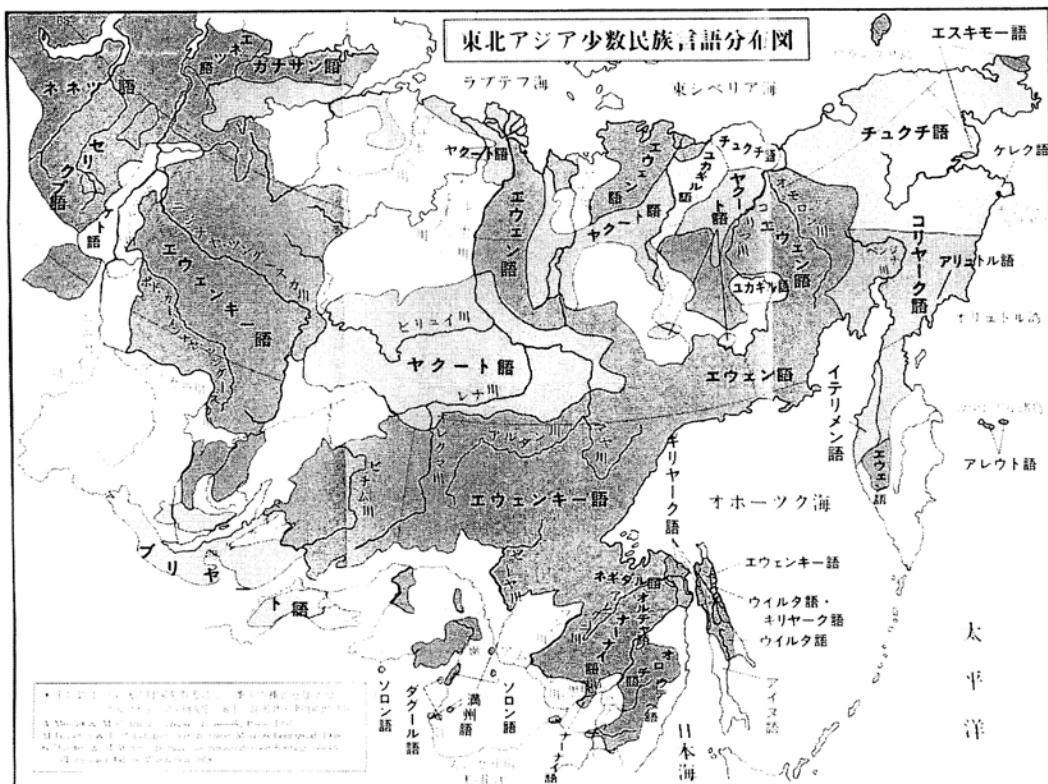


図3 ユーラシアの言語分布(70)

イスラム文化がかなり浸透しています。この惑星 sayari はアラビア語やペルシア語起源の外来語である可能性が非常に高いです。

3-6 アジアとその周辺では？

アジアの言葉や太平洋の島々や南北アメリカで話されている言葉を調べてみました。

日本語の古語は posī です。ちなみに復元された古代日本語 (posī と同時代) の火は pii (乙類の i) ~ po- となります。古代日本語には、母音が甲類、乙類の 2 系統があって神とオオカミのかみは別の言葉になることがあります。子音は、p → f → h と音が変化して現在の言葉になったりして語源の追求は素人にはかなり難しいことだといえます。

金思か(かは火へんに華)氏によると(64)日本語の Fo-si は朝鮮語の pjel (ビヨル) に対応することがわかります。なお、古代朝鮮語で火は pil (ブル) で現代語で光は pic(ビッ) 古代朝鮮語で pi-ci (ビジ) です。金氏によると、

星は光とも関係するそうですが、私は、日本語の光は甲類の i ですから、べつものだと考えるのです。

中山襄太氏は国語語源辞典(36)、続・国語語源辞典(69)を著し、そのなかでアジアの言葉をたくさん集められています。私たちの先輩になるわけで、そのパワーには脱帽します。彼はアジアの言葉における星と火との関連を示唆しています。

シベリアの諸言語には p, h, x を語頭に持つ語が多いです。大半はツングース系で、かつて清朝を中国に起こした満州人もこの語族に入っています。オロッコ、ギリヤーク、オロチ、ゴルドの各民族はサハリン、沿海州に居住し、古くから日本人と交流した可能性があります。

北尾浩一さんは「星の語源について、25年ぐらい前の大阪天文学研究会の『STARS & GALAXIES』で、シベリアの星と題して、今思えば冷汗の出るよ

表4 北方ユーラシアに言葉を求めて

うな拙論を書いたのを思い出しました。オロッコ語で星のことを H o s y e k t a と呼んでいました。中目覚氏著『オロッコ文典』(三省堂) からなのですが、もう一度国会図書館から借りてみようと思います。それから、ギリヤーク語では星 U n i g o r s となります。気になったのが、アイヌ語の星「ノチウ」とロシア語の Н О Ч Ъ Ю (夜にーという意味です) の関係です。ロシア語起源のアイヌ語として、O k n o (窓、ロシア語の O K H O) 等いくつかあります。北の方から、伝承が伝わってきたという可能性は今も考えることがあるのですが、稚内からサハリンへの船も出ています。星の伝承の調査の夢は限りなく続

きます。」とメールを下さいました。アイヌ語のノチウ(nochiw)については流紗方言でも(アイヌ語辞典 田村 草園社)でも千歳方言(アイヌ語辞典 中川裕 草園社)でも同じであの有名なジョン・バチラーもノチウと集録しています。アイヌ語で火はapeですが、文献(36)では火を意味するni,no,nuと関係するのでは無いかとありました。光はnupek、nipekuですから、これらとも関係するかもしれません。ape、nupekの p の字に注意してください。piiとの関係がありそうです。

次に、広大なアジアの深部に広がるアルタイ語族のトルコ語派、トルコ語での星は、yıldızです。アルタイ語源辞典によれば、星は

語族	諸語・語派	言語	星	備考	文献
シナ・チベット語族	中国語 タイ語群	現代中国語 タイ語 ラオス語 アホム語 黒タイ語 シャン語 チャム語 チベット・ビルマ諸語	星星(syeng) daau dao dau lao lau bitu taya kaama sao / vi sao		45 46 36 36 36 36 36 47 44 48
	苗(ミヤオ)語	青岩花苗 青苗 白苗 打鉄苗 龍匂花苗 花苗 カンボジア語	Kon Nu kon Net'kon Len Ha wa Lu shi dahrah		51 51 51 51 51 51 49
モン・クメール語族 オーストロ・アジア語族	インド諸語	グルング語 ロドング語 ドヒマル語 クハリ・ナガ語 ノウゴング・ナガ語	pira piti-pya, pitappa phuro peti piti-nu	ヒマラヤ ネパール東部	36 36
ムンダ語族		ホ語 コル語 サンタリ語 ブフミジ・ムンダラ語	ipil epil ipil, bhuraka ipil	ベンガル ベンガル ベンガル	36 36 36 36
シナ・チベット語族	チベット・ビルマ語派	マラバル語 ネワル語 バフリ語 タライン・モン語 クムティ語 レプチャ語 ヒマラヤ諸語	velli nagu nunggi noung nau hor kara	インド中部 ネパール ネパール インド インド ヒマラヤ ヒマラヤ	36 36 36 36 36 36 36
不詳					
不詳					

表5 アジアの言葉

yultuz ということでこれがトルコ語派諸語の語源になったのでしょうか。同じくトルコ語派のウイグル語では yultuz となります。木星は yupiter です。これは借用語ですね(42)。さて、トルコ語辞典(40)で yildiz 付近の単語を調べて見ますと yil というのは、年を表します。yildirak は Bright, shinning です。yildirim は Lightning, thunderbolt の意味です。iz は Footprint, track, trace を表します。このような事から yildiz は「輝くもの」を意味する可能性があります。なお、シベリアの奥地レナ川の中流域にサハ(ヤクト)自治共和国があります。私は、1989年、1990年と2回にわたり、現地を訪問しました。その地は、最北の

トルコ系民族、サハ人が20万人も住んでいます。顔は我々とそっくり、モンゴル系かと思うほどです。サハ(ヤクト)語では、haulen といい、他のアルタイ系の言語とよく似ています。

ちょっと離れてイヌイット語では Oo blu'a ok というらしいです(59)。シベリアエスキモー語では e la lu'ke tah となるようです(59)。

現代中国語では星は星星 (syeng or Xyeng シンシン) というようです。『甲骨文』(天来書院 2001年)によると、甲骨文字では「星」の字は、

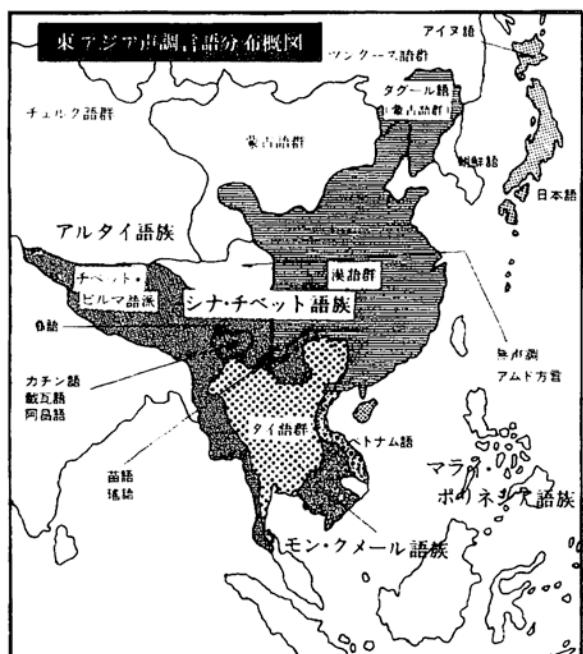


図4 東アジアの言語地図(71)



のような字(直線はつながっています)で表記されていて、木の陰から星が見えているようすを表しているようです。○をのぞいた部分は「生」の甲骨文字に当たるようですが、「日」に対応する甲骨文字(□に横棒)は含まれていません。(綾仁さん)

そこで、『字通』で調べてみると音は生(せい)で、正字は晶だとしています。この晶は水晶というように現代では使いますが、星



光の形だそうです。「説文」には、万物の精、上がりて列星と為る」とあるようです。星の読みはsyengだということです(45)。

また晶は星の光で、三星を以てその晶光を示すとあります。昌は

図5 漢字の星(45)

星が二つで明らかなことを示していますが、日は太陽です。日だけで、星を表しているのでは無いようです。

チベット語ではkaamaといい、タイ語では、daauといいます。またkhaw(カーム)と書いている本もあります。カンボジア語はdahrahで、ラオス語はdao、ビルマ語でtaya、ベトナム語ではsao(vi sao)です。

中国語、チベット語、タイ語、ビルマ語はシナ・チベット語族を形成しています。その中に、中国語、カム・タイ諸語、チベット・ビルマ諸語、ミヤオ・ヤオ諸語などがあります。中国南部にいる少数民族のミヤオ族は方言があるようです。

ミヤオ語(中国貴州省 青岩花苗)ではKon
ミヤオ語(贵州省 青岩付近 青苗) Nu kon
ミヤオ語(贵州省 青岩付近 白苗) Net'kon
ミヤオ語(贵州省 定番付近 打鉄苗) Len
ミヤオ語(雲南省弥勒付近 龍甸花苗) Ha wa
ミヤオ語(雲南省武定付近 花苗) Lu shi

ミヤオ語はミヤオ・ヤオ諸語に分類されます。カンボジア、ベトナム南部はモン・クメール語族を形成しています。

アジアの南東に眼を向けてオーストロネシア語族が太平洋に広がっています。

フィリピンのタガログ語では星はbituin、マレー語で星bintang、インドネシアは他民族国家なのでマレー語を公用語にしていますから星もマレー語と同じbintangです。フィリピンのすぐ北には台湾があります。タイヤル語(台湾のヤミ族の言語を鳥居龍蔵が収集し、それを戸部実之がまとめたもの(50)を参照すると)では、星はpugetachという様です。

フィリピン語系に近い同じく台湾の言語のアミ語ではvois、パイアン語ではvichoqan、アタヤル語はbingahで、語感はそれぞれにているかもしれません。その他、台湾の諸語ではfois, bois, boes, boisi, buet, bunatがあります(36)。この台湾諸語は、もっとも古いオーストラロネシア語の分離形態であるらしいとのことで

語族	諸語・語派	言語	星	備考	文献
オーストラロネシア語	西部マライ・ポリネシア諸語	タガログ語	bituin		53
		マライ語	bintang		54
		インドネシア語	bintang		52
台湾諸語		タイヤル語	pugerach	ヤミ語	50
		アミ語	vois		34
		アタヤル語	bingah		34
		パイアン語	vichoqan		34
メラネシア語派		中央カロリン語	fu		34
		ヤップ語	fishu		36
		キリバス	tuitui		63
		ロトマン語	hefu	フィジー	56
		モトゥ語	hisiu	パプア	34
		ボグー語	b'ain	パプア	34
ポリネシア語派		マオリ語	whetu	ニュージーランド	55
		ハワイ語	hoku		81
		サモア語	fetu		34
北米アメリンド諸語族	アメリンド	Cheyenne 族語	hotohke		57
南米諸語族	インカ	ケチャ語	qoyllur		58
		アイマラ語	warawara / wara		58

表6 太平洋を囲む言葉

す。

秋山さんはバーのフィリピン人マスターから聞いた話から、「タガログ語は知りませんが、星はbituin、月はbuhanだそうです。フィリピンではBituin、～という名前のタレントがいるみたいです。日本でいえば”星由里子”ってところでしょうか…若大将シリーズはちと古いですが」とのこと。

太平洋の島々では、ヤップfishuはミクロネシア、ハワイではhoku、ニュージーランドのマオリ族はwhetu、フィジーのロトマン語ではhefuで、いずれもポリネシア系です。

北米のネイティブアメリカンのCheyenne族はhotohkeといい、南米インカ帝国の末裔が使うケチャ語ではqoyllur、インカに従属してい

人たちの言語、アイマラ語ではwarawara又はwaraとなります。

3-7 日本語では星をなんと読んだのか？

古代の日本語で星は、posiと発音していた、また火は pii/po だと書きましたが、その意味について石山勝則さんは、「不確かで申し訳ないのですが、『ほし』の『ほ』は『火』で、『し』は小さなものを表すとの説明をどこか(出典不明)で呼んだ記憶があります。つまり『ほ』は、『ほたる』の『ほ』と同じというわけですね。」と述べられています。

有本淳一さんは、「星が現在のように鑑賞や観望の対象になったのは平安時代の前半、『倭名類聚抄』（西暦900年代前半）の成立の少し前くらいと言われていますが、それまでは忌み嫌うものだったようです。死んだ人間の魂と思われていたホタルの光と同じようなとらえ方をされていたそうで、いわばヒトダメをみる思いだったのでしょう。ですからこの石山さんのお話はすごく納得できますし、面白いですね。『ほ』＝『火』の『火』は焚き火などの火ではなく、特別な火を指してゐんじゃないかな、なんて思うのですが、それは思い過ごしでしょうか？ そもそも『ほし』



図 6 オセアニアの言語分布(72)

と呼ばれ始めたのはいつ頃なんでしょうね？たしか万葉集にはあったような気がしますが。(自信はありません。)」と返されました。

北尾さんは、「フィールドばかりやっていて文献面は弱いのですが、『ほし』について、民俗学関係の人と電車のなかでこの話題になって、『火石(ほし)』でないかというような話になりました。

それから、奄美大島、沖縄では、『ホシ』のことを『フシ』と言います。例えばプレアデス星団は群れ星(ムリブシ、ブリブシ)です。三つ星は、ミツブシです。

天文教育研究会の後、訪問した奄美大島で、『天ヌブリブシヤユミバユミナリュリー』という歌、『ヨアケミツブシヤ、ミチャルチュアネラヌ ワヌガカナシノデ イキンドミチャル』という歌を聞くことができました。」

作花さんは、「ほしの語源について海部さんも『宇宙を歌う』で『火石』といわれています。百人一首に『星』が出てこないのは有名ですね。干しや欲しはありますかが星はひとつもありません。ちなみに月は11首。万葉集にも柿本人麻呂の『天の海に・・・』以外は知りません。古事記や風土記にもないようで、古事記に星のことが載っているという指摘は池田真澄氏がはじめてですか？ 星はいつでもどこでも眺められるのに上古の日本人は星に関心なかったというはどうも信じがたいのですが。。。」

茨木さんは、「新村出『日本人の眼に映じたる星』(明治33年)では、火白(ホシロ)だという説(日本釈名、言海)を紹介し、この説には賛成できません、といつていながら、広辞苑の著者は自説を述べてはいません。また、星章旗と旭日旗とに見る国民性にも言及しています。」と紹介されています。

北尾さんはフィールドワークの研究から、「(1) 沖縄県石垣島のプレアデス星団(群れ星)を祭った『群れ星の御嶽(ムリブシオガ

ン)』は、大陸からの星の信仰の影響を受ける前の、日本人の星の基層文化を考えるひとつの手がかりになるのではないかと思います。(2) 兵庫県高砂で聞いた話です。『ヨアサになって、タナバタさんがいっしょに入るとき七夕。夜明ける時分にいっしょに入って、タナバタさんはひとつになる』タナバタ(織女と牽牛)が七夕の夜明け頃に、いっしょに低くなっていくのを見て、織女と牽牛がひとつになって会うという思いが育まれたのですが、織女と牽牛が出るときは約三時間も間隔があいているのに、沈むときはずっと間隔がちぢまることを観察していたからこそ生まれた話です。七夕の話は日本の固有のものと伝えられてきたものがあわざって形をえていったのですが、七夕の話にも何とかして日本の星の基層文化の謎を解く鍵がかくされていないか考えています。七夕については、あまり詳しいフィールドをやっていないのですが、それでも先日訪れた九州の大島では天の川の水は、地域の生活になくてはならないかかわりが育まれており、そこにも大きなテーマを感じています。

(3) 同じく高砂で聞いた話です。『旧6月26日、赤いスイカみたいな星が一つ二つ三つあがっていく。三つあがったとき黄色になる。お月さんの色になる。女人人が鐘持つてミツボシがあがるのを拝みに行きよった』旧暦6月26日(新暦7月18日頃から8月18日頃)の明け方の東の空で、月齢26の月とのぼりゆくオリオン座三つ星の創る景観のなかで祈る人びとの姿を想像しながら、妙見信仰等の星の信仰が日本に伝えられてくる前の人と星とのかかわりを想像しています。また、フィールドで感じることに、必ずしも人びとは星(ホシ)と言っていないことです。例えば、スバルボシ、スマルボシではなく、スバルさん、スマルさんというように、『ホシ』でなく『サン』と呼ぶことがよくあります。岐阜県の調査をされていた香田寿男氏が、ホシ

のことを人と呼んで、昔の人が、『大きい人』がいる。大きい人がでとんのさ』というように、星空のホシを大きい人、小さい人と呼んだと教えてくれたのが印象的でした。』と、一般庶民は、星をほしといわず、さん付けし、また人と呼んでいることが紹介されました。そういえば、私達も子供の頃、お月様、お星様と様を付けていましたね。

高砂の話に関連して、古典語には「つづ」という表現もあります。たとえば「ゆうつづ」=金星です。つづと書いている書物もありますし、つつと書いているものもあります。ゆうづと書いているものもあり、豆豆でつつと読ませているようです。「つづ」には、粒というほどの意味であるといわれています。また、「ほし」は丸い小さな点をなすものをいう、ともあります(35)。さて、古事記や日本書紀のイザナギの命の禊ぎの場面と神功皇后の韓国侵攻の場面では、底筒之男命（ソコツツノヲノミコト）中筒之男命（ナカツツノヲノミコト）上筒之男命（ウハツツノヲノミコト、日本書紀では表筒之男）の名前があり墨江の三前（スミノエノミマエ）であるとの説明があります。スミノエノミマエとは住吉神社の三人の神様ということです。住吉大社は航海の神様です。「うわつつ、なかつつ、そこつつ」はオリオン座の三つ星のことであり、それらがまっすぐ一列になって真東から上がってきますから、航海者の信仰対象にもなっているようです（古事記(73)の注を参考のこと）。古事記には筒の名前の神様がもう一人いて石筒之男命（イハツツノヲノミコト）といいますが、正体が不明です。私は星と関係があるのでは無いかと考えています。岩波文庫版の「日本書紀（一）」補注（巻第一）(74)には、この磐筒男尊（イハツツノヲノミコト）の事を注して「…ツツは星。（中略）島根・壱岐・筑後久留米・大分・香川・徳島・高知で粒をツヅ」という。古く空の星粒をツヅといったのであろう。（イザナミの生んだ火神カグツチ

をイザナギが斬る時に生まれた磐筒男尊・磐筒女神も、岩からでる火花を名付けたものと思われる。）とある。ここでも火と星の関係が見え隠れします。ところで、南太平洋のキリバス（ポリネシア）では星をtuituiといっています。ひょっとするとtuituiは「つづ、つつ」と関係あるかも知れません。また、オホーツク北岸からシベリア深部さらにはスカンジナビア半島東部まで火はtで表す言葉が広がっています。tog、togo、tuu、tut、to、tava、tugr、tuua、tuz、tsiiがそれです。(75)「つづ」が火の粉を表し星を表す言葉で、これらポリネシアやユーラシアの言葉とつながった言葉であるとしたら・・・はるか縄文時代につながる重層した日本語の古層をかいだ見る思いです。

古典には、

「年にありて一夜妹に逢ふ比故保思（彦星）もわれにまさりて思ふらめやも（万葉集）」
 「向南山にたなびく雲の青雲の星離り去き月を離りて（万葉集）」
 「天の海に雲の波立ち月の船星の林に榜ぎ隠る見ゆ（万葉集）」
 「…その不服はぬ者は唯星の神香香背男（かかせお）のみ。…（神代紀下注）」
 「天に悪しき神有り。名をアマツミカホシと日ふ。亦の名をは天香香背男。…（日本書紀卷第二、一書）」
 「…星の出づるに至るまで狩り殺しき。故、山を星くらと名く。（播磨風土記、神前郡）」とあります。また、「和名抄」には「星 保之。万物の精、上がりて生ずる所なり。」とあります。この表現は中国の古典「説文」の説明と同じです。古典文献には、星は「保思」や「保之」と書かれています。火と関係するのは、印欧語族と似た部分があるのが面白いですが、小さい粒、丸い小さな点を意味することも否定することはできません。また、太平洋に広がる言葉にf～やh～があるのは火との関係があるような雰囲気ですが、これはもう少し詳

しく調べないといけないと考えています。また、「干す」のほというのは火と同根だそうなので福江説も大きくはずれているものではないと思います(35)。

3-8 おわりに

印欧語族ではSTRで星を表しました。その意味は(星を空に)まき散らかす、または(星の)光が広がる、という意味だということでした。そのような事から第一章で述べたヨーロッパ人の祖先たちが星を*形で描いたことと大いに関係がありそうです。福江さんがstarというのは*形を表す言葉なのではないかという疑問はまちがいでは無いようです。また、東アジアからオセアニアにかけて、P、H、F、N、T、を語頭に持つ単語が広がり火、炎との関係がありそうです。

中国や日本ではヨーロッパから☆形が入るまで星を○で表したことは、ほのかな火や炎の印象、もしくは第1章に書いた星という概念を描いていて、人間の感性が民族や地域で多少異なるのを説明するものなのかも知れないと思うのです。

ただ、イスラム圏の人たちが星を○で描いたのは、kkbやnjbを解釈しないうちは、まだ謎のままなのですが。

この章で調べた「星」の名前を一部、地図に落として星の関する言語地図も作っていますのでご参照下さい(76)。

星、月、太陽など天体の名前を各言語で何というか調べています。ご存じの言葉がありましたら、TenkyoMLへご一報下さい。

「参考文献」

- 1 AN INTERMEDIATE GREEK-ENGLISH LEXICON OXFORD (1989)
- 2 戸部実之 1994『アルバニア語小辞典』泰流社
- 3 ELEMENTARY LATIN DICTIONARY LEWIS OXFORD (1975)

- 4 『伊和中辞典』(1989) 小学館
- 5 The New World SPANISH-ENGLISH and ENGLISH-SPANISH Dictionary SIGNET BOOK (1968)
- 6 浜口乃二雄、佐野康彦 1991『ポルトガル語小辞典』大学書林
- 7 『スタンダード仏和辞典 増補改訂版』(1975) 大修館書店
- 8 直野敦編 1976『ルーマニア語小辞典』大学書林
- 9 R.シンチングル、山本明、南原実 1974『現代独話辞典』三修社
- 10 CONCISE DUTCH AND ENGLISH DICTIONARY Teach Yourself Books (1977)
- 11 WEBATER'S NEW WORLD DICTIONARY OF THE AMERICAN LANGUAGE 2nd COLLEGE EDITION (1976)
- 12 尾崎義、田中三千夫、下村誠二、武田龍夫 1990『スウェーデン語辞典』第2版 大学書林
- 13 古城健志、松下正三 1994『デンマーク語辞典』第2版 大学書林
- 14 <http://www.hyperdictionary.com/dictionary>
- 15 八杉貞利『岩波ロシア語辞典』1974
- 16 <http://www.unicorn.org/dictionnaireUkrainien/listing.asp>
- 17 戸部実之 1993『実用ユゴスラビア語入門』泰流社
- 18 Sanskrit Dictionary MACDONELL OXFORD (1971)
- 19 URDU ENGLISH DICTIONARY FEROZSONS LTD. LAHORE
- 20 土井久弥編 1982『ヒンディー語小辞典』大学書林
- 21 戸部実之 1992『ベンガル語入門』泰流社
- 22 戸部実之 1990『シンハラ語入門』泰流社
- 23 戸部実之 1993『コンカニ語入門』泰流社
- 24 溝上富夫編 1988『パンジャーブ語基礎1500語』大学書林
- 25 中村公則 1977『ペルシア語小辞典』大学

書林

- 26 西村昌能 1992 架橋第2号 p88
 27 久保義光 1990 『実用フィンランド語小辞典』 泰流社
 28 松村一登 <http://homepage2.nifty.com/kmatsum/sonastik/Tt.html>
 29 <http://dict.sztaki.hu/deutsch-ungarisch>
 30 下宮忠雄 1979 『バスク語入門』 大修館書店
 31 佐藤信夫、飯島紀 1993 『アッシリア語入門』 泰流社
 32 <http://www.dictionary.co.il/right.htm>
 33 吉成薰 1988 『ヒエログリフ入門』 六興出

版

- 34 服部四郎 1999 『日本語の系統』 岩波文庫
 35 白川靜 1987 『字訓』 p676 平凡社
 36 山中襄太 1979 『国語語源辞典』 校倉書房
 37 知里高 星と☆形【2】

☆ちょっと気になる天文用語☆ 福江 純（大阪教育大学）

8 黄道十二宮・黄道十二星座 (zodiac)

黄道（天球上での太陽の通り道）に沿って、一周 360° をおよそ 30° の幅で分割したものを「黄道十二宮」と呼び、その領域の星座を「黄道十二星座」という。

宮	黄道十二宮	黄道十二星座
1	白羊宮	おひつじ座
2	金牛宮	おうし座
3	双子宮	ふたご座
4	巨蟹宮	かに座
5	獅子宮	しし座
6	处女宮	おとめ座

宮	黄道十二宮	黄道十二星座
7	天秤宮	てんびん座
8	天蠍宮	さそり座
9	人馬宮	いて座
10	磨羯宮	やぎ座
11	宝瓶宮	みずがめ座
12	双魚宮	うお座

メソポタミアの粘土板の記録からは、2000BCごろには不完全ながらも黄道十二星座が生まれていたようだ。紀元前625年にカルディア人が建国した新バビロニアでは占星術が体系化され、紀元前419年の楔形文字板には黄道十二宮の名前が現れている。

黄道十二宮が生まれた当時は、春分点がおひつじ座にあったので、おひつじ座（白羊宮）がトップだったが、地軸の歳差（26000年周期）で春分点が移動し現在はうお座にある（また、てんびん座にあった秋分点はおとめ座に移動した）。したがって、現在では、黄道十二星座と黄道十二宮は一つ分ぐらいいずれている。かつては占星術と天文学は同じものだったが、現在では、占星術と天文学はまったく異なる体系となり、春分点の歳差によって、実体的にも違ったものになった。

しかし古の名残は現代天文学でもそこかしこに散見される。たとえば、いまでも春分点を表すのに“おひつじ座”的記号（Yのような記号で曲がった2本の角を表す）を使う。また黄道十二星座のうち7つまでを動物が締めているので、黄道十二星座を英語ではzodiacと呼ぶ。これは、ギリシャ語のzoon（動物）に由来する（zoonはもちろんzooの語源）。さらに「黄道光」はzodiacal lightという。